

Culture in Psychiatry



C
CINEMA

変えられないものを受け入れる 平静さの果てに

—リービング・ラスベガス—

小澤 寛樹 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経科学教授

私の仲間にも、職場のデスクの引き出しにいつも“それ”を忍ばせている方がいます。なくなると落ち着かないようで、絶えず切らさないように買い足しては、誰かに見咎められないようにこっそりちびちび口に運んでいる様子。あんまり過ぎるのは体に良くないよ、と忠告はするのですが、本人もわかってはいるけど止められないそう。まあここでいう“それ”とはチョコレートのことなので私もそこまで本気で心配はしていないのですが、もしこれがお酒の瓶だったら話は別で、立派な“アルコール依存症”として治療が必要になるかもしれません。

アルコール依存症はニコチンやカフェイン、大麻やアヘンへの依存と同じように薬物依存症の一種として扱われます。この依存症を引き起こす有害な習慣のことを嗜癖 (addiction) と呼びますが、現代社会には実にさまざまな嗜癖に関する依存が存在し、社会問題化しています。ここ数年、大物有名人が禁止薬物を所持・使用していたとして大きく取り上げられることが相次いでいますし、ギャンブル行為に熱中するあまり自家用車に幼い子どもを長時間置き去りにしたままである

ことを忘れたなどという悲しいニュースに胸を痛めることもあります。お隣の中国や韓国では、寝食を忘れてオンラインゲームに打ち込んだ若年層が突然死するケースも発生しています。ですが、やはりなかでもアルコールに関する嗜癖は古代エジプトやメソポタミアの頃から文書が残されているほど古くからある現象で、本当に誰でも陥る可能性が高い、人類にとって最も身近にある依存といっても過言ではありません。

今回取り上げる映画のタイトルは『リービング・ラスベガス』。タイトルとは裏腹に、物語は主人公のベン (ニコラス・ケイジ) がラスベガスにやってくるところから始まります。ベンハリウwoodsの映画会社に勤める脚本家でしたが、アルコール依存のせいで職を失ってしまいました。生への意欲もすっかり失いつつあったベンは、解雇を機にロスの家を整理し、多額の退職金を手にラスベガスへと車を走らせます。その目的は「酒を飲み続けて死ぬこと」でした。

この物語は、原作者であるジョン・オブライエン自身のアルコール依存の体験が元になっています。若くしてアルコー

ル依存症になった彼は、一時は治療により禁酒に成功しこの映画の原作となる同名の小説を書き上げますが、のちに再発し33歳のときに拳銃自殺でこの世を去ります。小説の映画化が決定したわずか2週間後のことでした。

ラスベガスに到着したベンは、そこで娼婦のサラ (エリザベス・シュー) と出会い、やがて2人は生活を共にするようになります。モテルを引き払って自分のところに移ってこないかというサラに対しベンが出した条件は、絶対にお酒を止めると言わないこと。同じ身寄りのない孤独な境遇にあって、束の間の心の安らぎをベンに見出していたサラは、目に見えて悪化していくベンを目の当たりにしながらも禁酒を勧めることができません。それどころか、酔って暴れた尻拭いをしたり、血で汚れたシャツの替えを買ってきたりと尽くします。ベンはもとより死ぬ覚悟を決めていますし、財力の問題や取り繕う世間体もありませんでしたので、サラの行為は厳密な意味でのインエブリングとは異なるかもしれませんが、サラという協力者を得て、ベンの飲酒癖はさらに行き着くところまで極まっています。